



在日ムスリムコミュニティによる抗議デモ

# 「ガザに平和を！」、 各地で上がる声

作家・反貧困ネットワーク世話人 雨宮 処凛

## ガザの死者・3万人

「10分に一人、子どもの命が奪われている」

そう聞いたのは、イスラエルによるパレスチナ自治区ガザ地区への報復攻撃が始まった翌月の23年11月。戦闘が始まってからわずか1カ月で1万人の命が奪われたという現実には、ただただ言葉を失った。

そしてこれを書いているのは24年3月。戦闘は今も続き、この5カ月間でのガザの死者は3万人と言われている。負傷者は7万人以上。ガザ全域で食糧危機や感染症の流行に歯止めがかからず、子どもの餓死も相次いでいると報じられている。知れば知るほど、思考停止しなくなってくる。

23年10月7日に起きた、パレスチナの武装組織・ハマスによるイスラエルへの攻撃。

かつてない規模の突然の蛮行に、世界中が衝撃を受

けた。

一方、イスラエル側は猛烈な報復攻撃を開始。もともと「天井のない監獄」と言われ、イスラエルが作った塙やフェンスに囲まれてきたガザ地区に、以降、絶え間ない攻撃が続いている。多くの人の住処<sup>すみか</sup>だった場所は今、瓦礫<sup>がれき</sup>と化した無残な姿を世界に晒<sup>さら</sup>している。

難民キャンプや救急車までもが攻撃され、日々、死者、負傷者、そして行方不明者が増え続けている。

圧倒的な力の差でガザを攻撃するイスラエルには、世界中から「ジェノサイド」という批判の声が上がっている。

### 即時停戦を訴える動き・広がる

日本でももちろん、声を上げる動きは広がっている。私が初めてその声に触れたのは10月13日。イスラエル大使館前で開催された、在日ムスリムコミュニティによる抗議デモだった。

現場に行くと、イスラムの衣装に身をまとった老若男女が手に手にプラカードを持って集まっていた。そこに書かれたのは「SAVE PALESTINE」「BOYCOTT ISRAEL」「STOP BOMBING CIVILIANS IN GAZA」「JUSTICE」

「STOP WAR」「LOVE PALESTINE」などの言葉たち。そうしてイスラエル大使館前に、大きな声が響き渡る。

「FREE FREE PALESTINE!」

そんな抗議デモで衝撃を受けたのは、幼い少女が掲げたプラカードの言葉。そこには「AM I A HUMAN ANIMAL?」と書かれていたのだ。イスラエルの国防相が「我々は人間の顔をした動物と戦っている」と言ったことに対するものだろう。それに対して、子どもが「私は人間の顔をした動物ですか?」と訴えなければならぬ世界。75年にわたる、イスラエルによるパレスチナへの蹂躪<sup>じゅうりつ</sup>の一面を見た思いがした。

11月4日には、「殺すな! ガザ地区停戦緊急行動」が開催された。呼びかけ人は鎌田慧氏、落合恵子氏、上野千鶴子氏、神田香織氏、佐高信氏、田中優子氏、永田浩三氏、そして私。イスラエル大使館前に1600人が集まり、「人を殺すな」「土地を奪うな」「日本政府は静観やめろ」「今すぐ停戦」という声が響いた。

11月10日には、渋谷で「パレスチナに平和を! 11・10緊急行動」と銘打たれたデモが開催され、4000人が集まった。国連大学前に集まった中には、日本人だけでなく、様々な国籍の人の姿があった。そんなデモ前集会で、ガザ出身の女性・ハニンさんがマイクを握

## ◆特集 平和を求める女性たち



23年11月10日の渋谷デモ

った。

「今日、私は、パレスチナ人は存在している、と伝えにきました。私たちは、夢と願望を持ち、恐怖から解放されて生きる権利を持つ人間であることを世界に思い出させるためです。イスラエルにいくら資金と支援があっても、パレスチナ人を消滅させることはできません。」

冷たい雨が降りしきる中、みんな真剣に聞き入っていた。そうしてハニンさんは、今行われているガザへの空爆は、戦争ではなく「大量虐殺という犯罪」であると訴え、聴衆に語りかけた。

「私たちは今日、日本政府がこの大量虐殺に加担するなと強く求めるために集まりました。」

日本が、イスラエルを止めようと圧力をかけなければ、日本の手も血に染まることになります。私はすべてのパレスチナ人を代表してここに立ち、今すぐ停戦を要求します。

ガザへの空爆をやめてください。パレスチナの占領をやめさせてください。ガザの人々を自由に生きさせてください。」

拍手の音が、いつまでも鳴り止まなかった。

## 声は届くと実感

「ガザから遠く離れた日本で反戦デモやって何になるの？」そう思う人もいるかもしれない。そのたびに、私は2003年、イラク戦争が始まる直前のバグダッドに行った時のことを思い出す。現地で「戦争反対」と訴えるために行ったのだが、イラクの人々は日本人を見つけるたび、口々に言った。

「日本でも反戦デモをやっているとニュースで見た、ありがとう。」

9・11テロが起きてアフガン空爆が始まり、次はイラクかというあの時期、日本でも多くの反戦デモが開催され、私も参加していた。それを、イラクに住む人々は報道で見ていたのだ。あの時初めて、私は「デモには意味がある」と根拠を持って思った。これからは、「なんの意味があるの？」と言われても、胸を張ってこのことを伝えようと。そんな20年前と比較して、今はネットやSNSが比喩物にならないくらい普及している。遠く離れた私たちの声は、現地にも確実に届いている。

一方、24年2月には、「虐殺に加担しないで」という声が届くと実感することがあった。

イスラエルの軍事大手「エルビット・システムズ」と

協力覚書を締結していた伊藤忠商事が2月5日、そして同じく協力覚書を締結していた日本エヤークラフトサプライが2月9日、2月中を目処に契約を終了すると発表したので。

エルビット・システムズはイスラエル最大の軍需企業。戦闘が始まった13年10月より、イスラエルに20拠点ある工場をフル稼働させ、ガザに空爆・地上侵攻を続けるイスラエル軍に武器を提供し続けているという。その武器が、子どもをはじめとする民間人の命を日々奪い続けている。

そんなエルビット・システムズと手を切って――。

23年12月以降、「ヘパレスチナ」を生きる人々を思う学生若者有志の会「らはこの2社に対し、契約破棄を求める署名や会社前での抗議活動などを続けてきた。そうして2月、とうとう2社は、「死の商人」と言われるイスラエル企業と手を切ることになったのだ。

しかし、虐殺は今も続いている。

あまりにも悲惨な映像に胸を押し潰されそうでも、正直、ニュースを見るのもSNSを開くのも怖い。だけど、ガザから遠い日本で、「殺すな」の声を上げ続けていく。

(あまみや かりん)